リーダー
三谷　拓也 Takukya Mitani
西田　樹 Tatsuki Nishida
芹澤　鎮冶 Shinya Serizawa
平野　秀積 Hozumi Hirano

担当教員
岡本　誠 Makoto Okamoto
担当教員
佐藤　直行 Naoyuki Sato
担当教員
伊藤　精英 Kiyohide Ito
担当教員
櫻沢　繁 Sigeru Sakurazawa
担当教員
竹川　佳成 Yoshinari Takegawa

離れているヒトと触れ合う

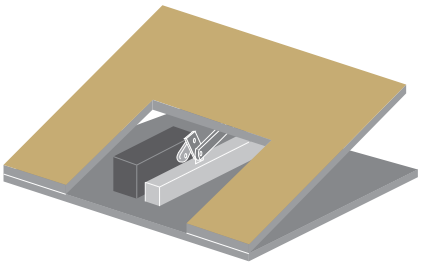
ヒトとヒトとは互いに触れ合っている時に最も相手を身近に感じるのである。つまり、触れ合いは二人の間の親密度を大きくあげ、互いの存在を感じさせるものであると言える。しかし、触れ合いを行うためには互いに手の届く距離にいなければならない。もし、その距離を伸ばすことができたのなら、我々は常にそのヒトを身近に感じることが可能になるだろうと考えた。

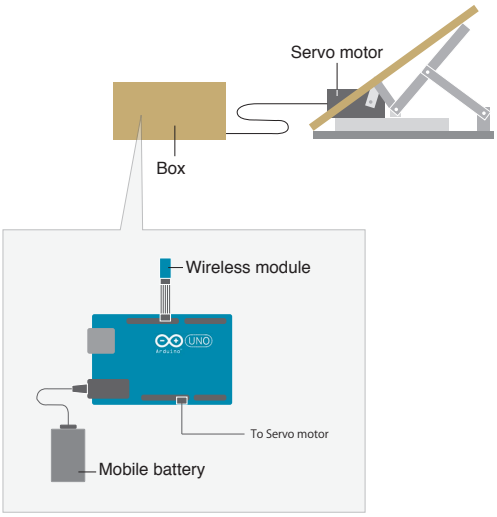
距離という壁のないスキンシップを

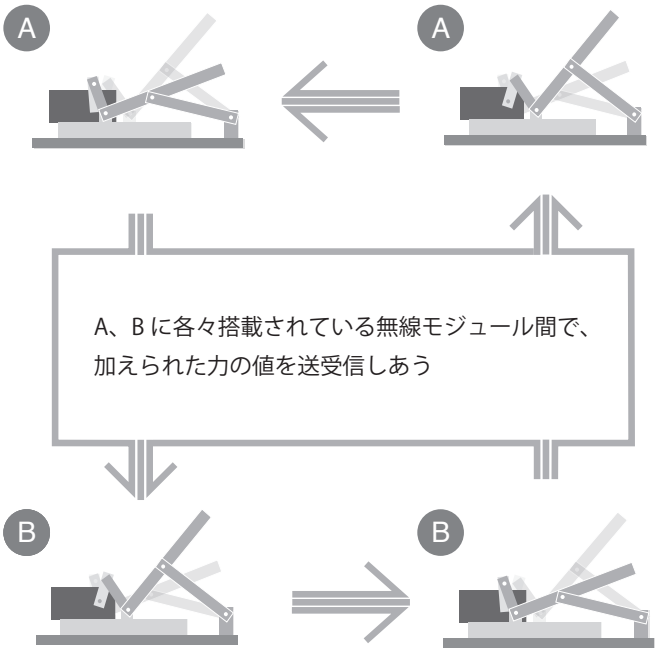
距離が離れている条件下においても、自分の加えた力と同等の反応を相手側に再現して与えることが可能になれば、ヒトの自然な触れ合いを違和感なく行えるようになると考えた。そこで我々は無線通信や様々なセンサを用い、ヒトの触覚を拡張するデバイスの製作に取り組んだ。

©Future University Hakodate, future body project, 2015.

「力の伝えあい」を可能にする



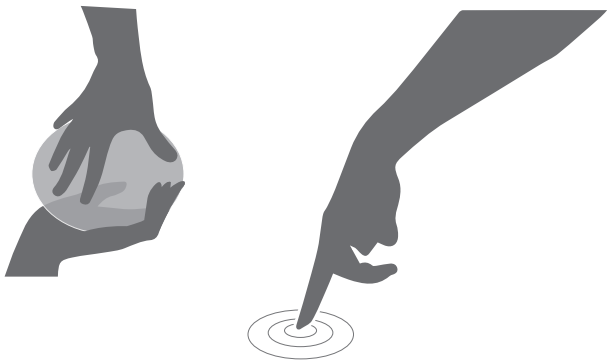




新しい触れ合いの手段

argue では、離れあっているヒトとヒトの触れ合いを可能にし、使用しているお互いが触覚で反応や状態を感じ取るという、新しい体感を得ることができる。つまり、argue は言語を必要とせず、視覚や聴覚に依存することもない、即時性のあるコミュニケーションを図る一つの手段として使用することができる。

今後の展望



中間発表時点で課題として挙げていた、「送受信一体化」、「無線通信化」の二点を成し遂げた。今後、この argue を発展させるならば、例えば、「握られる」、「叩かれる」などのフィードバックであったり、動きに伴う圧の変化に対する出力の変化も可能にさせるといったことである。つまり、「ヒトの動きの細分化」を読み取り再現するなどの拡張も考えられる。

©Future University Hakodate, future body project, 2015.